

編集後記

『比較文明研究』第十五号をお届けいたします。本号には、論文五本（内、仏文論文一本）、研究ノート一本、書評二本を収録することができました。平成二二（二〇〇九）年度は、麗澤大学開学五〇周年記念の年であると共に、トインビー生誕二二〇周年の年でもあり、比較文明文化研究センターでは、平成二二一年一月一日（土）に、「人類と母なる大地」のゆくえ——いま、トインビーが世界に発信するもの——と題した記念シンポジウムを開催いたしました。吉澤五郎客員教授と川窪啓資客員教授には、シンポジウムでの発表をもとに、論文を書き下ろしていただきました。

*

吉澤五郎客員教授の「アーノルド・トインビーの肖像——歴史学から比較文明学への道——」は、「生誕二二〇周年」にちなんで、「トインビーの知的肖像を描きながら、その卓抜な知的挑戦の本質と現代的な意味を明かす」ことを目的としている。「知的挑戦」は、「二一世紀の『文明共存説』に導く『グローバルバリエーション』の比較文明学」を構築し「人間存在の奥義を質した」ことにあり、「知的肖像」は、「全ギリシアを熟知した稀有な学者」として出発し、「伝統的なアカデミズムに胚胎する……ギリシア観と袂を分か「ち」、人類文明史を広

く鳥瞰し、その全体的視野から諸文明の相互理解と共生の道を探求した」とことと描かれている。トインビーが歴史学から比較文明学へと到達した「道」を明らかにした優れた論文である。

川窪啓資客員教授の「トインビーの高等宗教と廣池千九郎の聖人研究」は、東西の知的巨人の比較を試みた論文である。トインビーの精神史を伝記的方法により描きながら、文明優先史観から高等宗教優先史観へ転換するところを詳しく論じ、トインビーの高等宗教を「一宗一派の枠を突き抜けた、把われる所のない人類的立場の歴史家の宗教 (Religio Historici)」ととらえている。廣池千九郎に関しては、「諸聖人が、人類の安心、平和、幸福、魂の救済にどのような貢献をしているか」という、モラロジーの観点から聖人研究を行なったとして、廣池のソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、孔子の研究成果のポイントを要約的に示した上で、廣池の聖人研究の特色を、「第一に、……四聖の真精神を理解、体得、実践しなければならない」としている点、「第二に……観念的、抽象的ではなく、四聖の教説、事跡の中の救済力、生命力の発見、闡明に力点を置いている」ことを明確化した。最後に著者は、二人の学聖に対する「崇敬と感謝」の言葉をもって結んでいる。トインビーと廣池の人間性と思想のエッセンスを比較した優れた論文である。

染谷臣道客員教授の「自立する文明にどう対処するか？——ポスト文明に向けて——」は、人間、環境、自然、文化、文明の関係を、

「本来、人間も環境とともに自然なのであり、一体だったのだが、人間が文化を発明し、環境と向き合うようになったとき、環境から自立した。文化は自然を分断した。その文化は次第に厚みを増し、人間の環境からの独立性を高めた。現代文明はその究極であろう」ととらえた上で、技術を手がかりとして、文明が人間（内なる自然）と環境（外なる自然）を苦しめている状況を克明に描き出していく。そして、現代文明の問題は人間の「欲望爆発」に起因していることを突き止める、自律性をもったポスト文明を構想している。複雑な現代世界の状況をとらえる視座を提示した優れた論文である。

服部英二客員教授の「La Tour Eiffel est-elle une Pyramide? lien entre les patrimoines culturels」は、『比文研ニュースレター』（No. 14, May 28, 2008）に「文明史の風景―エッフェル塔はピラミッドか?―文化遺産を結ぶもの―」として発表された論考を、フランス語論文として書き改められたものである。著者自身の観察眼と文明的考察をもとに、エッフェル塔、オベリスク、パルテノンが皆、ピラミッドであると発見していくプロセスに見る著者の推論と考察は、読者をわくわくさせるものがある。非常に優れた比較文明論のフランス語訳である。

松本亜沙子客員教授の「海洋の視点を再考する」は、〈山の視点〉〈陸の視点〉をもった新田次郎の「珊瑚」という小説に触れ、海難事例や漁船の活動範囲等をデータに基づき詳しく説明しながら、「海の

視点」は、……距離感覚も位置の確定も、〈陸の視点〉とは大きく異なって「いる」と、新たな対比的視点を提示し、〈海の視点〉から「日本における海運・歴史・文化を再考する必要があると考えられる」と、未開拓領域の存在を指摘している。海洋生態学・深海生物学の専門家が切り開きつつある海洋文化論の優れた論文である。

小林道憲客員教授の「情報宇宙論覚書」は、情報を基礎概念として、モノの世界にコトが生じる根源を探り、物質、生命、宇宙が自己組織する姿を、数式ではなく言葉により精緻に描き出した科学哲学の優れた論文である。

*

多くの方々のご協力を得て、今回も充実した研究成果を収録することが出来ました。ご多忙の中、玉稿をご執筆賜りました先生方、また、本誌完成にご尽力いただきました行人社野澤幸弘社長に、篤く御礼申し上げます。

（立木教夫）